

# TOKYO 人権

●インタビュー／成宮アイコ

誰もが「生きたい」と思う  
同じ人間

—「生きづらさ」を叫んで  
人と人をつなぐ

人権と  
スポーツ  
2020

●特集

女性アスリートが  
健やかに活躍する社会に向けて

●バービー (Barbie™) に見る「美の多様性」  
美しさに基準を設ける時代はもう古い!

# 誰もが 「生きたい」と思う 同じ人間 「生きづらさ」を叫んで 人と人をつなぐ

なる みや  
成宮アイコさん  
朗読詩人

幼いころから家庭で暴力を受け、学校ではいじめに遭い、不登校やリストカットを経験してきた成宮アイコさん。強迫性障害や社交不安障害に苦しみながらも、高校時代から生きづらさを言葉で表現する展示会や朗読会を行ってきました。その中で人とつながることの大切さに気づき、誰もが少なからず生きづらさを抱えているのだと知ります。成宮さんが活動を通して伝えたいことは何かをうかがいました。

## —子どものころの話をお聞かせください。

気がついたときには、祖父から日常的に暴力を受けていました。「お前は家族の最下位だ」と言われ、そのように振る舞うことしか知らなかったのが、幼稚園の先生に他の子と同等に扱われても、どう接したらいいか分からなかったんです。当時は『何か変だな』と感じたくらいだったのですが、小学生のとき、SFだと思っていたアニメ『ちびまる子ちゃん』の家族の団らんが、実話をもとにしたストーリーだと知って驚き

ました。暴力のある毎日はずらかったけれど、それでも受け入れて生きてきたのは、どの家庭も同じだと思っていたからです。ところが、その環境が当たり前ではないと気づいた瞬間から、生きることが苦しいと感じるようになりました。人間関係をどう築いたらいいのかますます分からなくなり、会話をするこゝさえできなくなりました。すると、声の出し方まで分からなくなって、場違いな大きさの声を出してしまったりします。やがて「あいつ、ちょっと変だよな」とか「声がキモいよね」と言われるようになったのです。

学校に行くのが苦痛になり、家にいることも多かったのですが、そうすると『このまま私が死んでも誰も気づかないかも』と孤独な気持ちに襲われました。どうかして社会とつながりたいと思い、よくイトーヨーカドーやマンガ喫茶に通いました。こうした場所なら、人はいるけれど悪口を言われることはないからです。

### —なぜ、詩の朗読ライブを始めたのでしょうか。

高校生になってから、行き場のない気持ちを日記帳やインターネットのブログにつづるようになりました。その日、実際にあったことを書く日記以外に、詩のようなきれいな文章を書く日記、名言のように1行で文章を書く日記、妄想で作り上げた「リア充（現実の生活が充実している）アイコン」の架空の日記とか。これは私にとって会話の代わりのようなものだったので、誰かと普通に話せていたらこんなにたくさん日記は書いていなかったと思います。

その日記を、地元の新潟市内にあるミニシアターで展示することになったのが、高校卒業を間近に控えたころです。イトーヨーカドーのように安心していられる場所として出入りしていたのが縁ですね。そしてそのとき、展示会に来てくれた同じ年頃の子に「私もこういう症状があるんです」と話しかけられたのです。こんなことは初めてでした。

当時からSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）では「死にたい」とつぶやく人が多く、私自身もよく投稿していました。そんなときに「その気持ち分かる」と返信してもらえると『独りじゃない』と思えて、救われたことがたくさんありました。しかし、画面上のやり取りなので、どこか現実味が無いというか、同じ人間なんだと実感しづらいところがあったのです。

そんな中で、初めて展示会で実際に苦しんでいる人に出会い、『私と同じような気持ちの人がちゃんと存在しているんだ』と実感しました。朗読ライブを始めたのは、そんなふうになんとつながる感じをもうちょっとリアルにしたかったのと、『死にたいと思っている人は本当に存在しているんです』と、少しでも多くの人に示したかったからです。

### —ライブはとても独特ですね。

#### 1つ1つに成宮さんのメッセージを感じました。

書きためていた日記の朗読に加え、「あなたの言葉を叫びます」という企画を恒例で行っています。SNSやライブで事前に生きづらさを抱えた人たちからエピソードを募集し、それを朗読するものです。それらのエピソードは、私の体験ではないのに、読んでいると

『私のことかもしれない』と共感するものばかりです。だからきっと、私以外の誰かも「自分と同じ気持ちの人がいる」と感じてほっとすると思うのです。私が誰かの言葉を代わりに叫ぶことで、どこかで誰かが人とのつながりを感じてくれる。自分だけ周りとは違うとか、社会から取り残されているのではなく、自分も皆と同じ地続きの世界にいるんだと伝えられたらうれしいです。

また、ライブでは朗読した詩やエピソードをプリントした赤い紙を持ち帰ってもらっています。私のライブに来てくださる人は、きっと何かしらの生きづらさを抱えているケースが多いと思います。そんな中で身支度をして電車に乗り、人混みを歩いて会場までどり着くのはとても大変なことだったはずですが、だから、「自分はこの日、生きてこの会場に行った」という証として、赤い紙を持ち帰ってほしいと思っています。

また、ライブの様子は動画配信をされていて、来場者による撮影も自由です。会場に来られなかった人も、動画や写真を見ることで、誰かとつながることができるとは思いません。私は、苦しんでいる人にお金や仕事をあげることができないけれど、社会とつながることはできるかもしれないと思い、ライブを続けています。

### —「生きている」という実感は日常のどんな瞬間に感じるのでしょうか。

SNSで誰かとやり取りをしていると、例えばこんなことがあります。夜、寝られなくて「4時になったら朝刊がくる。どうしよう」とつぶやくと「分かる。郵便受けに朝刊が入る『コトン』で音、怖いよね」と返してくれる人がいます。そうすると、寝られないこと自体は解決しないけれど、あの音に怯えている人が他にもいるんだと知って安心します。自分が誰かと結びついていると感じることで、つらくてもあと3日、あと1週間生きてみようと思うことができるのです。つらい過去も障害も絶対にはない方がよかったのですが、生きづらさを「昨日のドラマ見た？」みたいな「あるある話」にしていけたら、少しは楽しく過ごしていけるような気がしています。

最近SNSが発端で事件が起きることもあります。私はあまりSNSを規制してほしいとは思っていません。規制を求める人には、SNSでつながることで救われた人が多いことも知ってほしいのです。

ただ、時にはそのSNSの書き込みに傷つくこともあります。それに対してどうしても何か言いたい場合は、感情的にならず丁寧な言葉で文章を書くことを意識しています。とはいえ、SNSは私にとって逃げ場でもあるので、受け入れ難くても無理に争わず、見なかったことにしたり、別のSNSに移動してやり過ごしたりすることも多いですね。また、私はアイドルと



“あなたも、私もちゃんと生きてきたんだ”と伝えたくて、  
ライブでは客席の一人ひとりに視線を向ける。 ©Naoki Tajima

プロレスがとても好きなので、それを見て落ち込んだ気持ちを励ましたりもします。プロレスラーやアイドルが頑張っている姿を見ていると『人間は捨てたもんじゃない』と思えてくるんですよ。

どんな人も、生きていくにはこうした逃げ場や解決方法を持っていることが大切だと思います。ただし、一つだけに限定して依存してしまうのは危険なので、『80%くらい使える逃げ場や解決方法』を10パターンくらい用意しておくのがよいのではないのでしょうか。

### —誰ともつながることができず、死にたいと思っている人にどんな言葉を掛けたいですか。

SNSには、匿名で質問をする「質問箱」というサービスがあります。一般的には「どんな財布を使っていますか」とか「お勧めのコスメは」などの質問が投稿されるものですが、私のところには質問というより、悩み相談ばかりが投稿されてきます。それらに回答するときに私が心掛けてるのは“アドバイスをしない”ことです。『私にも同じようなことがありました』『私も解決できずに困っています』『今もまだあまり元気ではありません』など、ひたすら自分が思ったことだけを伝えます。そうして回答を受け取った人が「他にも自分と同じ人がいる」と実感してくれたらいいなと思っています。

また、私は「死にたい」とつぶやくこと自体は健全なことだと思っているんです。つらい気持ちをため込んで死んでしまうよりはずっといい。気軽に「つらい」とか「死にたい」とか吐き出しながら、死なずに生きてほしいと思っています。

### —“生きづらさ”なんて自分とは関係ないと思っている人も多いと思います。

「もっと頑張れ」とか、「あの人はマシだろう」と

といった励まし方はつらいものなんだと知っていただきたいですね。これはたとえるなら、辛い物が食べられない人に「あの人は激辛を食べている。だから食べる」と言っているようなものです。つらさとは、誰かと比べるものではないんですよ。私がライブで装飾を派手にしたり、メンタルの問題とは関係ないミュージシャンを招いたりするのは、無関心層に少しでも興味を持ってもらえたらと考えてのことです。今、コラムを連載しているニュースサイト『Rooftop (ルーフトップ)』でも、アイドルのインタビューなど多様な情報が配信されているので、できるだけ幅広い人に気づいてもらえるきっかけになればと思っています。

以前は、福祉系のイベントに出るとそのカラーがついて回ってしまうと思い、意図的に避けていたんです。『どうせ公的な機関の福祉関係者になんて分かってもらえない』という気持ちもありました。ところが、たまたま大きな福祉イベントに出演した際、関係者席に座っていた方が私の何気ない発言に小さく拍手してくれたんです。それを見て『偏見を持っていたのは私の方だった』と反省しました。どんな立場であろうと理解のある人はちゃんといるのだと気づいてからは、場所を選ばず、より多くの人に言葉を届けることを意識しています。

また、私はこうしたライブを通して、一見立派に見える人も少なからず生きづらさを抱えているものだと知る機会も増え、「みんな同じ人間なんだ」と安心しました。世間では個性的であることが素晴らしいかのように言われますが、私は個性的であろうとなかろうと、誰もが「生きたい」と思う同じ人間で、等しく尊い命なのだと伝え続けていきたいと思っています。

インタビュー／林 勝一(東京都人権啓発センター 専門員) 編集／小松 亜子  
撮影／Seikichi Tachikawa (表紙)、細谷 聡 (p2)、Naoki Tajima (p4)

#### ●成宮アイコ (なるみや・あいこ)



1983年、新潟県生まれ。機能不全家族で育ち、不登校やリストカットを経験。強迫性障害や社交不安障害に悩まされながらも、生きづらさをテーマにした言葉の展示や朗読を行う。こうした活動がメディアで取り上げられ、現在は東京に在住しながら全国で朗読ライブを行う。2017年、『Rooftop』と『TABLO』でコラム連載中。ライブにはドラムやベース、エレキギターなどのミュージシャンが加わることも。著書に『あなたとわたしのドキュメンタリー』(書肆侃侃房)がある。



profile

WEBサイト <http://aico-narumiya.info/>



@aico\_narumiya



aico narumiya

美しさに基準を設ける時代はもう古い！

## バービー (Barbie™) に見る「美の多様性」

「バービーのようになりたい」。そう思ったことのある女性は決して少なくはないでしょう。いつの時代も世界中の女の子が憧れる存在であるバービーが、2016年に生まれ変わったことをご存知でしょうか？ バービーが教えてくれる「美しさ」について取材しました。

「バービー人形」(以下、バービー)と聞いて、皆さんは、どのようなバービーを思い浮かべますか？ バービーは、1959年に米国でデビューし、1962年に日本でも発売が開始されましたが、時代の変遷とともにバービーも変化を遂げています。したがって、思い浮かべる容姿や表情、その装いは、世代によって異なるかもしれません。

分かりやすい変化の一つは表情です。米国で誕生した当初のバービーは、口を閉じているた



バービーの表情の変遷  
©2018 Mattel. All Rights Reserved.

め、やや物静かな印象を受けます。それが1971年からは正面を見据え、どこことなく意思の強さを感じさせるように。1976年には少し口を開いて笑うようになり、その表情はより生き生きとしたものへと変化していきました。また、バービーの職業の幅も広がり続け、宇宙飛行士、医師、企業家など、その数は約180種類に及びます(2018年6月現在)。こうしたバービーの歴史は、発売元である玩具メーカーの米国マテル社が、時代の流れをきめ細かく読んできた表れだともいえるでしょう。

そんな同社が、2016年、「バービー ファッショニスタ」シリーズの拡充を発表しました。同シリーズは、バービーと無限のおしゃれを楽しむことをコンセプトに、多様なヘアスタイル、目の色、肌のトーンなどを展開してきましたが、今回新たに体型も多様化し、オリジナルの体型に、トール(長身)、カービー(曲線美)、プチ(小柄)の3種類が加えられ、計4種類になりました。このリニューアル時、米国マテル社は次のようなコメントを発表しています。「57年間にわたり、バービーはそれぞれの時代を反映してきました。そのため、バービーは世界でナンバーワンのファッションドールであり、世界的な憧れの象徴であり続けています。今回のような新しいドールを提供できることを、私たちはとても喜ばしく思っています。多彩な体型、肌色、スタイル

があることで、女の子たちは、それぞれに自分の心が惹かれるドールを見つけることができると考えています。私たちは、世界中の女の子たちとそこご両親に対して、バービーを通して時代に合わせた“美しさの多様性”を示していく責任があると考えています」。

こうした米国マテル社の新たな試みを、日本の消費者はどう受け止めたのでしょうか。同社の日本法人であるマテル・インターナショナル株式会社に尋ねたところ「新しいコンセプトについて、バービーで遊ぶお子様の親御さんからは多くの賛同をいただいています。今後も美しさの多様性や、個人のアイデンティティを尊重するコンセプトを日本の皆さんに伝えていきたいと思います」との回答が寄せられました。

私たちの実像に近い多様なバービーに、憧れだけではなく、親近感を抱く人も多いことでしょう。近年、欧米を中心に「ありのままの自分の姿を受け入れよう」という「ボディ・ポジティブ」の考え方がムーブメントになっていることから、画一的な美しさの基準を設けようとする時代は終わりつつあるといえそうです。いかなる肌の色も、髪の色も、体型も美しい。「美しさの多様性」を認める時代になった今、まずはありのままの自分、ありのままの身近な人の美しさを発見してみませんか？



体型も多様化したバービー  
©2018 Mattel. All Rights Reserved.

インタビュー／田村鮎美(東京都人権啓発センター専門員) 編集／那須桂

### もっと知りたい!

米国マテル社・公式ホームページ内  
「バービー ファッショニスタ」のサイト  
<https://barbie.mattel.com/en-us/about/fashionistas.html>

<取材先情報> ・マテル・インターナショナル株式会社



# 女性アスリートが 健やかに活躍する社会に向けて

近年、日本では女性アスリートの活躍に注目が集まっており、東京2020大会のメダル獲得にも期待が寄せられています。しかし、過度なトレーニングや体重制限により健康を損なう選手が多く、競技レベルを問わず支援の充実と指導者への啓発が求められています。女性の健康に生きる権利とスポーツをする権利、双方を守るための取り組みについて取材しました。

## 女性アスリートへの期待

2004年のアテネオリンピック・パラリンピックで、日本代表選手の約半数を女性が占めるようになってから、国内では女性アスリートに強い関心が寄せられるようになりました。しかし、当初は女性アスリートの健康問題にそれほど理解が広がっておらず、トップクラスの選手をスポーツ医・科学の視点からサポートする国立スポーツ科学センター（JISS）においても、重点的な支援は行われていませんでした。

そんな中、2011年にサッカー日本女子代表がワールドカップで優勝し、2012年にはレスリングの吉田沙保里選手がオリンピックと世界選手権で13大会連続優勝を果たすと、国内では急速に女性アスリートへの強化と支援を本格化する機運が高まったのです。さらに2013年、東京でのオリンピック・パラリンピックの開催が決定したことを受け、文部科学省は女性アスリートのさらなる競技力向上を目的に「女性アスリートの育成・支援プロジェクト」を創設。女性アスリートの健康問題にも着目し、調査・研究や医・科学サポートなどを充実させる事業に乗り出しました。現在、JISSをはじめ、病院や大学などで取り組みが進んでいます。

## 女性アスリート特有の健康問題とは

アメリカスポーツ医学会では、1990年代から女性アスリートの健康問題に警鐘を鳴らしており、特に多く見られる疾患として「利用可能エネルギー不足（以下、エネルギー不足）」「無月経」「骨粗しょう症」を挙げ、これらを「女性アスリートの三主徴」と定義しました。中でも無月経（初経発来がない、または3カ月以上月経が止まる状態）と骨粗しょう症の引き金になるのがエネルギー不足です。これは、運動量に見

合った食事が摂取できていない状態を指し、性別を問わず心身にさまざまな悪影響を及ぼします。女性の場合は月経の周期に異常が現れることが多く、エネルギー不足が改善されない状態が続くと月経が止まってしまうのです。



東京大学医学部附属病院  
女性診療科・産科医師  
能瀬さやかさん

しかし、女性は「月経がない方が楽」と考えがちなことに加え、選手は自身の健康より目の前の結果を優先する傾向にあることから、無月経を放置するケースが少なくありません。無月経になると骨量が減って骨粗しょう症になり、疲労骨折のリスクが高くなるだけでなく、将来、不妊につながる恐れもあるなど、あらゆる面で女性の健康を損なうのです。

2014年にJISSと日本産科婦人科学会が、大学の女性アスリートを対象に行った調査は、健康問題が明確化する画期となりました。それによると、無月経の選手は、新体操やフィギュアスケートなど「審美系競技」で16.7%、陸上の中長距離など「持久系競技」で11.6%も存在していることが分かりました。これは、スポーツをしない女子大学生の無月経の割合1.8%を大きく上回っています。また、疲労骨折をする時期は高校在学時が最も多く、中には繰り返し発症する選手がいることも明らかになりました。

この調査を中心となって進め、東京大学医学部附属病院の女性診療科・産科において「女性アスリート外来」の開設に尽力した同院の医師、能瀬<sup>のせ</sup>さやかさんは次のように語ります。「女性が生涯で最大骨量を獲得するのは20歳頃です。10代で無月経に伴う低エストロゲン状態や低体重があると、最大骨量を獲得できず、それ以降平均値まで戻すのは極めて困難です」。

また、JISSのスポーツドクターである土肥美智子<sup>どひみちこ</sup>さんは、選手の健康と勝利を両立する意義を強調します。「世間ではどちらかというと、けがや病気を克服した選手に注目が集まりがちです。しかし、本来は選手が

結果を残しつつ、けがも病気もせず大会を終えることの方が素晴らしく、それこそが本当の意味で『サポートが成功した』といえると思います」(土肥さん)。



JISSスポーツドクター  
土肥美智子さん

こうした認識を広めるためにも、社会に正しい知識を伝えることが必要です。そして、中でも特に支援と教育を充実すべきなのが10代の選手たちなのです。

## 中高生のスポーツの現場とは

東大病院の女性アスリート外来には、2017年の開設から1年間でのべ467人が診察に訪れました。年齢は14~45歳、競技レベルは日本代表から地方大会出場までとさまざまですが、相談内容の62%は月経周期異常(無月経や月経不順)に関するものでした。このことから、能瀬さんは「女性アスリートの健康問題に競技レベルの差はありません」と断言します。

さらに、受診者の年齢を14~19歳に限定すると、月経周期異常に関する相談は75%に上りました。能瀬さんはこの結果について次のように語ります。「指導者や選手に十分な理解が広がっていないことに加え、指導者が男性の場合は、選手も指導者も月経の話がしづらいようです。減量をきっかけに摂食障害となる選手もいますが、選手は試合に出たいためコーチやチームメイト、保護者に摂食障害であることを隠すのが一般的です」。

強いストレスを抱え込み、体重を増やさないために極端な食事制限をする、あるいは食べた物を隠れて吐くような摂食障害を重症化させる選手も少なくありません。実際、同外来では月経周期異常のある女性アスリートのうち、12%が摂食障害と診断されており、公認スポーツ栄養士による食事指導と併せ、スポーツ精神科医との連携も欠かせない状況です。

## 女性アスリートの健康を守るために

能瀬さんは、選手が追い込まれるのを防ぐため、第三者によるサポートの必要性を訴えます。「学校であれば、養護教諭が定期的に問診し、必要に応じて産婦人科医につなぐなどの仕組みを制度化するのが理想です」(能瀬さん)。しかし、制度の整備はまだ先になると見込まれるため、能瀬さんは理事を務める一般社団法人女性アスリート健康支援委員会の活動の一環として、養護教諭や産婦人科医への啓発活動に力を入れています。産婦人科医向けの講習会は2014年に始まり、

今年中に47都道府県を回り終える予定で、養護教諭向けのシンポジウムは、今年度は東京で開催する予定となっています。

さらに能瀬さんは、学校で男女ともに正常な月経について教育することを提言します。「多くの女性が、正常な月経を理解していないため、異常にも気づくことができません。また、男性の中には将来、女性アスリートの指導者になる人がいるかもしれません。男女問わず、早い段階での教育が必要です」(能瀬さん)。

こうした女性アスリートに対する支援はパラスポーツの現場においても進んでいます。日本パラリンピック委員会は、2017年に能瀬さんを委員長とする「JPC女性スポーツ委員会」を設置しました。東大病院と連携し、専用の相談窓口をWEB上や試合会場で設けるなどし、データ集めや対策を行っています。

能瀬さんによれば、無月経で疲労骨折を繰り返した選手が成績を伸ばした例はなく、トップになる実力を持ちながら10代で競技を諦めた選手も数多く存在するといえます。しかし、確かな支援さえできれば10代の選手を後押しすることができ、結果として日本の競技力向上につながる可能性もあるのです。

能瀬さんは、スポーツ自体はもともと健康によいものであることから「スポーツが女性の健康を害すると受け取られることは本意ではありません」と力を込めます。「そもそも、女性アスリートの健康問題が認識されるようになったのは、女性が参加できるスポーツが増え、活躍の場が広がったためでもあります。これはとても素晴らしいことだと思うのです」(能瀬さん)。

女性アスリートのスポーツをする権利と、健康に生きる権利を守るためにも、支援の充実は急務といえます。私たちもまた、この課題に対する理解を深めた上で、精いっぱいの声援を送りたいものです。

インタビュー/坂井新二(東京都人権啓発センター 専門員) 編集/小松亜子

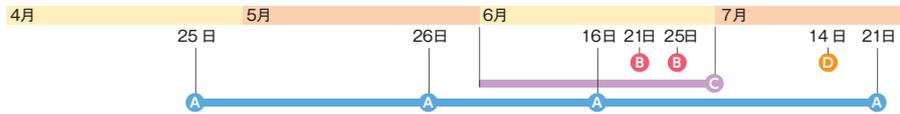
### 特集



### 気軽に相談しましょう!

年代や競技レベルを問わず、気になることがあれば産婦人科を受診しましょう。女性アスリートの三主徴に関する講習を受けた医師の氏名などは、女性アスリート健康支援委員会のHPで検索できます。

- 国立スポーツ科学センター (JISS) 女性アスリート支援プログラム  
<https://www.jpnsport.go.jp/jiss/tabid/1276/Default.aspx>
- 東大病院 女性アスリート外来  
[http://www.h.u-tokyo.ac.jp/patient/depts/a\\_joseika02/athlete.html](http://www.h.u-tokyo.ac.jp/patient/depts/a_joseika02/athlete.html)
- 若年女性のスポーツ障害に関する研究  
<http://femaleathletes.jp/>
- (一社) 女性アスリート健康支援委員会  
<http://f-athletes.jp/>
- 障がい者女性アスリート専用相談窓口  
[fsports-project@umin.ac.jp](mailto:fsports-project@umin.ac.jp)



**A** 東京都人権プラザ企画展  
**名越啓介写真展「Familia 保見団地」**

**展示** 愛知県豊田市にある「保見団地」は、住民の半数近くが日系ブラジル人であるなど、外国にルーツを持つ人々が暮らす多国籍な公営団地です。写真家・名越啓介氏が住民と生活を共にし、3年間にわたりその日常を撮影した作品を展示します。

- 日時 2018年4月25日(水)～7月21日(土) 9:30～17:30
- 会場 東京都人権プラザ 企画展示室(入場無料)  
港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階

**関連企画**

**1 トークセッション 名越啓介×崎山敏也(TBSラジオ放送記者)**

- 日時 5月26日(土) 14:00～16:00 **終了**

**2 スライドトーク 名越啓介×川田洋平(編集者)**

- 日時 6月16日(土) 14:00～16:00
- 会場 東京都人権プラザ セミナールーム
- 定員 80名(無料・当日先着順)
- その他 情報保障(要問合せ)、託児保育(要事前申込)
- お問い合わせ  
東京都人権プラザ TEL 03-6722-0123 FAX03-6722-0084

**B** 6月は就職差別解消促進月間です  
なくそう就職差別 問われる企業と社会の人権感覚

**行事** **講演と映画の集い**

- 日時 平成30年6月21日(木) 13:30～16:30
- 会場 沖永記念ホール(帝京平成大学内) 豊島区東池袋2-51-4
- 定員 1,000名(無料・当日先着順)
- 講演 「人権に配慮した職場づくりのために～ハラスメント予防と対策～」
- 講師 岡田 康子(株式会社クオレ・シー・キューブ 代表取締役会長)
- 映画 「だれにでも開かれていますか?～公正な採用選考を求めて～」
- お問い合わせ  
東京都 産業労働局 雇用就業部 労働環境課 TEL 03-5320-4649

**人権啓発映画会**

- 日時 平成30年6月25日(月) 13:30～16:45
- 会場 台東区ミレニアムホール(台東区西浅草3-25-16)
- 定員 300名(無料・事前申込制)
- 映画 「“尊重する”から始めよう～公正採用選考の基本を学ぶ～」  
「ケアアニ ～あなたでよかった～」
- トーク 菅原 健介(小規模多機能ホーム・ぐるんとびー駒寄)
- お申し込み・お問い合わせ  
(公財)東京都人権啓発センター TEL 03-6722-0085

**C** 6月は東京都HIV検査・相談月間です!

**私たちにできる事**

昨年、都内でHIV感染が分かった人(HIV感染者・AIDS患者)は464人でした。HIVは感染しても症状がほとんどなく、感染を知るには、検査を受けないとわかりません。そのため早めの検査がとて大切で、この機会にHIV検査を受けてみませんか。

- お問い合わせ 東京都 福祉保健局 健康安全部  
感染症対策課 エイズ対策担当 TEL 03-5320-4487

**検査・相談**

- 東京都南新宿検査・相談室[無料・匿名]  
要予約 03-3377-0811(HIV・梅毒) ※月間中はクラミジア・淋菌検査有り  
月～金 15時30分～19時/土・日 13時～16時30分
- 東京都多摩地域検査・相談室[無料・匿名]  
先着順(即日) 検査 土曜 13時～15時(HIV・梅毒)  
お問い合わせ 090-2537-2906(9時30分～17時 日・祝除く)
- 都内保健所等での検査相談の検索  
東京都HIV検査情報Web <http://tokyo-kensa.jp/>
- 東京都HIV/エイズ電話相談[匿名]  
TEL 03-3292-9090(月～金 9時～21時/土日祝 14時～17時)

**D** 人権問題都民講座  
**東京のイスラム社会**

**講演** 東京のイスラム社会の特質について何うとともに、イスラム教徒にとって東京は暮らしやすい場所なのか等についてお話をしていただき、「共生」の意味について考えます。

- 平成30年7月14日(土) 14:00～16:00
- 会場 東京都人権プラザ セミナールーム  
港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階
- 講師 クレイシ・ハールーン(HAROON QURESHI)  
日本イスラム文化センター/マスジド大塚
- 定員 80名(無料・事前申込制・応募多数の場合は抽選)
- 申込締切 平成30年7月9日(月)
- 情報保障 手話通訳あり(手話通訳以外は要問合せ)
- 託児保育 要事前申込
- お申し込み・お問い合わせ  
東京都人権プラザ TEL 03-6722-0123 FAX 03-6722-0084

(公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から賛助会員制度を設けております。趣旨にご賛同いただき、ご加入下さるようご案内申し上げます。

個人賛助会員 一口 2,000円 団体賛助会員 一口 30,000円 (公財)東京都人権啓発センター 総務課 TEL 03-6722-0082

● 団体 会員の 皆様	(公財)東京都中小企業振興公社	(一財)東京都営交通協会の	東京臨海高速鉄道(株)	東京都住宅供給公社	(公財)東京税務協会	NPO 法人 TEOS
	(株)首都圏環境美化センター	(一社)東京都信用組合協会	(公財)東京都環境公社	東京都職員信用組合	(公大)首都大学東京	(株)日本アクセス
	(公財)東京都歴史文化財団	東京人権啓発企業連絡会	(株)東京エイドセンター	東京都商工会連合会	(一財)東京都弘済会	東京港埠頭(株)
	(株)ミライト・テクノロジーズ	(公財)東京都学校給食会	(公財)東京しごと財団	東京臨海熱供給(株)	自治労東京都本部	(株)ゆりかもめ
	東京都中小企業団体中央会	(一社)東京環境保全協会	東京水道サービス(株)	(株)東京ビッグサイト	(株)東京交通会館	(有)関東紙業
	東京都下水道サービス(株)	(株)東京国際フォーラム	東京交通サービス(株)	(公財)東京観光財団	東京食肉市場(株)	(順不同)

● 編集後記

5月には修学旅行の中学生が人権プラザにたくさん訪れた。ポッチャや競技用車イスの体験、写真展の見学などを通して、「人権」という言葉が、旅の思い出として少しでも記憶に残ってくれたらと思う。(林)

久しぶりに編集に復帰しました。活字に戻ったことをきっかけに、スマホに頼りきっている生活を変えていきたいなあと思っています。でも便利だから、つい触ってしまうのよね… (田村)

TOKYO人権 Vol.78 2018年夏号 2018年5月31日発行(年4回発行)

● 制作・印刷/株式会社トライ  
● 発行/公益財団法人 東京都人権啓発センター  
〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル 2階  
TEL 03-6722-0086 FAX 03-6722-0084  
<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>



マルチメディアDAISY版を作成しています。ご希望の方は(公財)東京都人権啓発センターまでお問い合わせください。「DAISY(デザイン)」とは、視覚障害などさまざまな理由で活字を読むことが困難な方のための、デジタル図書です。

この冊子は再生紙を使用しています。

